

サビエル生誕五百年



巡礼の道

244

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

突然の死

～東日本大震災②～

カストロが同級生だったというキューバ出身のチリノ神父は、体は大柄だが気持ちは繊細で優しく、慈父のよう

に誰からも尊敬された神父である。十年近く前だったと思うが、前立腺ガンを患われた。一度は元気に

「病気よりも健康を、短命よりも長寿を望むようなことはせず、主なる神を賛美し、敬い、これに仕えること

さる」と笑顔で言われたことを思い出す。宇部のホスピスに入

院され、何度か見舞いに行つたが、痛みを薬で抑えるため、少しきつ

つそうであつたが死の不安などは全く感じられず「早く神様のところに行きたい」と何度

も口にされた。サビエルと同じイエズス会員。創立者イグ

ナスオ・ロヨラの名著「霊操」にあるように

「死の準備」：自分がこの世に存在できなかったことを感謝する死でありたい。生涯に出会つたすべての人に感謝の



家族でホスピスのチリノ神父を訪ねる(この2カ月後に帰天された)

先日の東日本大震災の死者・行方不明者は二万七千人を超える。

直前まで平穏な日常生活を送っていた人たちが、家族との別れも、死の準備もないままの突然の死。これほどの不条理はない。これらが人生という子どもや若者の死は余りに残

「どのように死を迎えるか」ということは「どのように生きるか」ということではあるまいか。

大自然の脅威に対して人間の非力さを思い知らされたとはいえず、今回の余りに大勢の突然の死は受け入れ難い。この現実遭遇した私たちは「日々の生活をただ漫然と生きるな」と警告された思いがする。

重い気持ちで春の日差しに誘われて庭に出る。特に手入れをしたわけでもないのにチューリップが、水仙が、パンジー、ムスカリ、クリスマスローズ、貝母(ばいも)などが咲き競う。

現代人は死に対して背を向ける傾向がないだろうか。医学の進歩、物質文明の反映、宗教の影響の弱体化などによつて死を遠ざける。しかし、死は誰も避けることはできない。死は限りある命の大切な部分に思えてくる。

夏から秋へ、そして冬の営みへと移る。誰もこれを動かすことはできない。科学が発達し、人間は自然の営みを軽視し、傲慢(ごうまん)になつていないだろうか。

突然の死を強いられた大勢の方々、せめて避難生活を今もしている

十五万人を超える皆さんが春の営みに目をとめ、心のゆとりのある日常生活に一日も早く戻れるように祈りたい。

「いつも幸せなほほえみを贈りなさい。あなたがたのこころを贈りなさい」
(マザー・テレサ)



自然の営みは花咲き競う春だけではない